

海外留学は就職に有効

国際教養大学

卒業のハードルを高く設定



中嶋 嶺雄 学長

大学の理念が 人材を育てる

「本学では卒業するためのハードルを高くしていますので、全員が卒業できるわけではありません。受験の時より、勉強が必要です。それが

「本学では卒業するためのハードルを高くしていますので、全員が卒業できるわけではありません。受験の時より、勉強が必要です。それが

中嶋嶺雄学長は同大の学生が企業より評価を得ているポイントを三つほど挙げた。まず、2004年開学の新しい大学を選んだ。バイオニア精神、徹底的な英語指導と1年間の留学で培われた国際性と精神的なたくましさ、そして寮生活・集団生活で身に付けた協調性であるという。

「本学では卒業するためのハードルを高くしていますので、全員が卒業できるわけではありません。受験の時より、勉強が必要です。それが

今春卒業予定の大学生にとって、就職状況はかつての「就職氷河期」並みの厳しさとなっている。そうした悪条件の就職戦線に健闘をしている大学もある。国際教養大学(秋田県秋田市)は昨年度と比べて内定率の落ち込みがないという。その要因はどこにあるのか、同大関係者に取材をした。

「本学は秋田にあり、立地的には恵まれていませんが、首都圏のメーカー、商社を始め多くの上場企業が自社の説明に来て下さいます。これは一期生の評価が得られた結果だと思えます。そして今は学生の就職に対する意識を高める大切な機会となっている」と源島室長。

同大の就職指導はシンプルである。受け入れ先を自分で探すことが義務付けられているインターシップと1年次から行うキャリアデザインの授業である。エントリースターの書き方やマナー講習は必要に応じて実施をしている。

結果として、企業は同大の生的人間的な素質と、留学経験による適応能力、コミュニケーション能力を評価しているという。

他大学の大きな違いは1年間の留学が全員に課せられていることである。源島室長は「留学からの帰国時期と就職活動のタイミングが難しいのですが、大学としては学力の質を保証する義務を優先しますので、就職活動はあくまで学生の個人責任かつ主導で行うものだ」と説明しています。しかし、大学としても、学内での企業説明会開催や個別企業への通年採用依頼等の支援を行っています。と、大学の本分を守ることを大切にしている同大のポリシーを語った。

就職指導は学生の素材を生かす

就活は自分で工夫、 学びが優先



源島 福己 キャリア開発室長

源島福己キャリア開発室長によると、今年卒業予定の三期生の就職内定率は年末までに100%になったという。

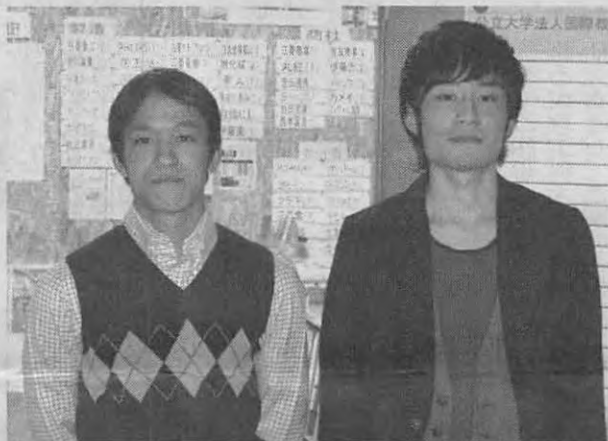
「本学は秋田にあり、立地的には恵まれていませんが、首都圏のメーカー、商社を始め多くの上場企業が自社の説明に来て下さいます。これは一期生の評価が得られた結果だと思えます。そして今は学生の就職に対する意識を高める大切な機会となっている」と源島室長。

就職が内定した4年生の佐々木広さんと副島浩樹さんに、就職活動の様子と大学生活について話を聞いた。佐々木さんは、留学から帰国するのが3年の冬になってしまい、他大学の学生に比べて活動が遅れ、焦りを感じたが、結果として、就活情報が少ない分、余計なことに振り回されず志望企業へのアプローチに専念できたという。

また、米国留学では、異文化と外国語の生活を通して、たくましさや身に付き、帰国後は少々のことでは動じなくなってきたことを話してくれた。

就職内定が決まった4年生

留学と授業で身に 付けた前向き精神



副島浩樹さん (丸紅株式会社内定)

佐々木広大さん (株式会社メタルワン内定)